

(1) 那須烏山市まちづくり研究会ワークショップグループ

夢のあるまちづくり

萩原 宣子

平成19年に、大野邦雄先生から「主婦の目線でまちづくりを考えてみませんか？」という誘いがあった。平成20年3月に、女性団体連絡協議会の有志と市民の有志合計15名で、宇都宮共和大学の久保先生を中心にワークショップグループがスタートした。

定例会は、毎月第3水曜日の19時～21時までで、会場は那須烏山商工会館の2階である。平成20年には、「活気あるまちにするためには」「若者が闊歩するまちとは」「観光客で賑わうまちにするためには」など、理想のまちづくりについての情報収集や意見交換をした。そして平成21年には「夢のあるまち」を3グループにわかれてジオラマに表した。そのジオラマを山あげ会館や鯉のぼり祭に提示し、「夢のあるまち」の人気投票や抽選会をした。

その結果「清水川公園に足湯をつくる」「烏山女子高の廃校利用」「駅前広場の整備」がベスト3に選ばれた。これらのベスト3の実現を願って、大谷市長に要望書を提出した。



夢のあるまちのジオラマづくり



市民のみなさんがジオラマを審査

平成21年の後半に、夢のあるまちづくりの話し合いやジオラマ作りだけでなく、何か行動に移してみようということになった。さらに話し合いを深めた結果、「市民の憩える場」とか「観光客が癒される場」があると良いという話しのなかで、4年前から閉店となっていたコーヒーショップが、土日だけオープンすることを知った。それならウイークデーだけお店を貸してもらい、私たちがコーヒーショップをやってみようということになった。

早速、オーナーに話したところ、快くオーケーしてくれた。

コーヒーショップに参加できる人を募ったところ、9名の主婦が手を挙げてくれた。9名なので1日3人態勢で、火曜・水曜・木曜の3日間だけ営業することとした。運転資金として、ワークショップの会員からは出資金として1万円をだしてもらった。コーヒーカップは、お店にあったものをそのまま使わせてもらうことにした。コーヒー豆は、前の経営者が使っていた神戸のブランドコーヒー「こだわりの萩原コーヒー」を使うか、他社のコーヒー豆を使うか飲み比べてみた結果、高くても「こだわりの萩原コーヒー」を使うこととした。



いよいよ、市民カフェ35番館がオープンした。オープンセレモニーには、大谷市長も駆けつけてくれた。

私たちの経営目標は、以下のとおりである。

- ・気楽に来れるふれあいの場
- ・ゆっくりくつろげる場
- ・誰もが親しくなれる社交の場
- ・様々な情報交換ができる場
- ・また来たくなる場

主婦ならではのサービスにも心がけることとした。宇都宮から先生を招き、シフォンケーキやチーズケーキの作り方を研修したり、平成23年には神戸の工場へ行き、コーヒー豆の焙煎の仕方を見学したり、コーヒーのおいしい淹れ方の研修をしたりした。



オープンから5年目となった現在では、ワンコインランチやクリームあんみつ、かぼちゃプリン等もメニューに入り、お客様から喜ばれている。経営状況としては、一日平均20人から30人の来店者がある。

毎週第4木曜日の14時から16時までは、「オレンジカフェ」という那須烏山市地域包括支援センター主催による認知症とその家族のための集まりの場を提供している。勿論私たちスタッフも認知症サポーターとして研修を受け、その対応も行っている。

また、サービスとして50円お得なカフェ券の販売も行っている。市民の各種サークルの作品の発表の場の提供は月替わりに実施している。古民家コンサートの折の出前出店も実施した。

開店以来、市民カフェ35番館は、メディアからも注目され、下野新聞、とちぎ朝日、栃木よみうり、るるぶ那須烏山、パーティ誌等に採り上げられ、お陰で多くのお客様がわざわざ来てくれるようになった。

【どんなお客様がいるかという・・・】

- ・カウンターでおしゃべりをする人
- ・仲間同士で打合せする人
- ・予約をして会議をする人
- ・コーヒーを飲みながら本を読む人
- ・遠方から噂を聞いてくる夫婦
- ・わざわざ遠方よりランチだけ食べに来る人 等

【お客様の声としては・・・】

- ・ほっとする
- ・店の人とおしゃべりが出来る
- ・情報交換が出来る
- ・また来たい
- ・コーヒーカップが素敵
- ・ランチが安くて美味しい
- ・ドアを開けた途端、コーヒーの香りが出迎えてくれる 等

月1回の市民カフェ35番館連絡調整会議を実施して営業についての連絡調整を行い、よりよい市民カフェにするためこれからも努力していきたいと思う。

(2) 特定非営利活動法人 野うさぎくらぶ

地域からはじめよう子育て応援

矢口 和美

幼稚園の子どもがいる5人の母親から平成16年の秋からスタートをした。初めのうちは、自分たち親子が楽しければ良い集まりであった。しかし、集まっていた場所は住んでいる町から5キロ離れた高根沢町の児童館。当時のコーディネートの高野さんから衝撃的な一言を聞いた。「ここに来る利用者の7割が那須烏山市の方々です。」と。とても驚いたが、同時にみんな思っていることが一緒に改めて、子どもを遊ばせ親同士が繋がる場所<居場所>が必要だと少しずつ思い始めた。更に高野さんは、「自分たちの町で子育てをしなければ成長していく子どもたちの居場所が出来ない。」と教えて頂き、地元で繋がる仕組みの大切さを気づかせてくれた。大人も子どももみんなが本気で居場所が必要と願うならば、我々が少しずつでも動き続けていれば自然と賛同し、いつしか役場も動いてくれると<根拠の無い自信>強く感じた。



みんなの願いを書くワークショップ

【母親たち】

- ・親子同士で遊べる場所が欲しい
- ・気軽に繋がるサークルが欲しい

【こどもたち】

- ・思い切り遊べる場所が欲しい
- ・お友達とゆっくり遊びたい



子どもたちが喜ぶ美味しい手作りのお菓子を焼いてくる母親たち

自分の子どもだけではなくみんなで子育てを楽しみ始めて、叱られる子どもたちが減少してきた。また、生まれたての赤ちゃんを他の母親たちはとても抱きたがり、とても大切にお世話をするようになった。新米の母親はその様子を見て子育てを自ら学び始める。





ボランティアの活動も盛んになり小学生の学校帰りには宿題を見てくれるボランティアや、季節の行事に洋書を読むボランティア、母親の悩みを聞きあうボランティア、洋服の寄付から販売をするボランティアなど沢山の行事に合ったボランティアはいつの間にか参加する母親たちの協力体制により出来上がっていった。

平成21年 年間利用人数 延べ1600人



<まちなか子育て拠点設置運営事業>

平成22年2月から24年3月まで

烏山駅前通りに～碧いビー玉～サロンをオープン

母親たちが子ども達の思い出になる写真のスクラップブックを作成。他にも、このサロンでは

- ・ かんたんおやつ・ベビーマッサージ
- ・ 手作り七五三の髪編み など



<那須烏山市地域版プラットフォーム事業>

平成24年4月から25年3月まで

市内の団体からの協力・提供により完成した事業

～第1弾 みんな大好きわくわく塾～

古民家で昔暮らしを2泊3日で体験し、勿論ご飯はかまど焚きなので、火起こしから始めた楽しい体験。

お月見会・新そば・ママコン・子育て冊子の改定版



<まちづくり研究会と学童クラブの協働事業>

平成24年の夏に足利工業大学と役場の方に那須烏山市近代化遺産を巡るツアーで暑い中案内して頂き分かりやすい説明で自分たちの町の素晴らしい遺産を発見することができた。

平成25年の夏は国際医療福祉大学と社会福祉協議会とで福祉体験を行って頂いた。少しの勇気と少しの優しさがあれば、困っている人を助けることに繋がる大切な学びもできた。

この委員会でもたらしてくれたものは斬新なアイデア体験と上質な心の経験を積むことで結果、新しい試みが子ども達の意欲<やる気>を引き出す事に繋がっていった。

(3) 特定非営利活動法人 那珂川流域悠遊会

特定非営利活動法人 那珂川流域悠遊会 活動報告書

小口 格男

1. プロフィール

(1) 発足年

平成19年、那珂川流域「まちの駅」「川の駅」連絡会として発足する。
平成21年、特定非営利活動法人 那珂川流域悠遊会として登記される。

2. 活動報告

(1) 平成20年

文部科学省の事業で那須地方の文化と産業について、実地研修を行う(数回)。



那須地方の歴史



烏山和紙について



この地方の民話



鷺子神社の夜祭り



小砂焼実習



烏山和紙実習



那珂川流域の自然資産



アンケートの提出

(2) 平成21年(法人登記以降)

悠遊会単独の事業では、環境美化整備活動を行う(数回)。



那珂川から茨城県へごみが流れることを思い、大洗の海岸清掃に参加する。
恒例となる



那珂川町の森林公園、すくすくの森清掃に参加する。
毎年参加

農水省の事業として、再生推進調査委託事業を行う(1年間)。



自然資産の調査



河岸の状況



間伐竹の利用



和紙作りの実習

このほか、洞窟を利用したキノコの栽培、廃校を介護施設として利用可能か等、多岐にわたる調査を行った。

(3) 平成22年

すくすくの森環境美化整備活動、大洗海岸清掃、武茂川のゴミ拾いと清流下り他、市の助成によるサクラの苗木植栽、等を行った。

(4) 平成23年

市からの「荒廃・放置竹林の伐採による那珂川流域緊環境保全・景観向上」と(財)河川環境管理財団の「東日本大震災災害避難者親子を元気づける」を受託した。市の事業は緊急雇用対策であり、従業員を雇用しての事業で、主に荒廃竹林の整備、伐採をした竹で竹炭を作る、竹酢液を作る等の実験も行い、併せて竹で工芸品の試作をした。



伐採前の竹林

伐採後の竹林



試作した竹の作品

(財)河川環境管理財団は震災にあわれた方々に、那珂川をボートで下り元気を出してもらおう事業だ。



皆でパドルの練習



Eボート3艇で川下り



息が合ったパドルさばき

上記の他に、恒例の悠遊会独自の事業も行う。

(5) 平成24年

市の「荒廃・放置竹林の伐採と川下りによる那珂川流域環境保全人材育成」を受託した。前年度も行った竹林整備の他に、竹工芸品、ラフティングボート、パソコン、和紙漉き、陶器作りと人材育成のためのスキルアップのための事業を行った。



竹の間伐



竹炭作り



ボートの研修



パソコン研修



和紙漉き研修



陶器作り研修

上記の他に、恒例の悠遊会独自の事業も行う。

(6) 平成25年

本年は公的助成は受けず、悠遊会独自の事業を行う。



竹林の整備



環境整備



ボートの訓練



ボート事業



公園清掃



水芭蕉植栽

(7) 平成26年

本年も助成は受けず、特にラフティングボートの事業に力を入れる。

4月1日～10月31日現在で、122名の乗船者数になる。恒例になった、悠遊会独自の事業も行う。



ネパールからの
お客様



愛媛県
今治市からの
お客様

(4) 石ヶ入りの自然を愛する会

石ヶ入りの自然をもう一度

大金 文雄

1. 思い出

懐かしい思い出が沢山よみがえってくる。

ドジョウすくいをして遊んだ“堀っこ”、昼はトンボ・夜にはホタルを追っかけた田んぼのあぜ道、栗やグミの実を取りに行った山々、メジロやシジュウカラ等の野鳥を追いかけたあの沢、考えただけで昔の思い出が直ぐに目の前に広がってくる。清らかな堀の水、季節になると黄金に色づく棚田、山に入ると木の葉のじゅうたん、木々の間には遮るものもなく、真夏でもひんやりとした空気等々、豊かだった自然も本当に懐かしい。知恵を出し、工夫を凝らしながら遊んだ大勢の仲間たちの顔が直ぐに浮かぶのも思い出が強いからなのか。



2. 活動の契機

今、山や原野・畑が荒れている。

里山の雑木林は篠や藤に覆われ足を踏み入れることすらままならず、雑木やスギ・ヒノキの林は立枯れ・倒木等がかつての豊かな森林の面影はなくなってしまった。燃料としての雑木、建築資材としてのスギ・ヒノキの需要が少なくなり、資源活用の機運が急速に低下したためである。利便性に欠ける原野や畑の利用率低下も、林野がススキや篠に覆われ荒野と化してきている一因になっている。



遊び慣れ親しんだ石ヶ入りの自然。昔のような自然を少しでも取り戻したい、そして子や孫に遊んでもらいたい、そんな思いが石ヶ入りの自然再生活動の第一歩である。

3. 活動の経緯

いまから8年前、田園自然環境保全再生支援事業としての土地改良区による農地の基盤整備が行われることとなった。石ヶ入りに工事の手が入り、田畑の地形が大幅に変わることとなったが、野生の植物や昆虫等水辺の生き物を保全しながら工事を行うことが義務付けられ、改めて石ヶ入りの動植物の調査が行なわれた。その結果、自然環境の豊かさにより



数多くの貴重な昆虫や魚・植物が確認され、保全活動の必要性が高まった。田・畔・土手の草刈り・土水路の整備等に季節的な整備活動の必要性が認められたことから、自治会並びに自治会有志からなるメンバーが集まり、環境整備活動へと繋がっていった。併せて農地・水環境整備事業の一環として彼岸花・山モミジ・山桜等の植栽事業が行なわれ、道路

脇・山林等の環境整備にも力を注ぐこととなり今日に至っている。

4. 活動成果

環境整備活動の一環として進められた土手の普請作業、草刈り作業により茅等の雑草が刈払われ蘇った棚田。 今日、ミズスマシやゲンゴロウ・タガメ等数多くの水生昆虫が確認され、土水路には希少な魚類等が確認されている。 また、沢沿いの草むらにはオニヤンマを始めとするトンボ類の種類が豊富に飛来し、水辺には産卵のための営みをあちこちに見ることが容易である。



少しではあるが里山にも手が入り、植えられた彼岸花が少しずつその株を大きくし、木々の下草の緑と調和し鮮やかな色彩を際立たせている。 近年、インターネット情報により道路わきの彼岸花を被写体に収めるカメラマンの数が増えたように思われるのは気のせいかな。 植栽された山モミジ・染井吉野・山桜・山モミジ等も、四季折々にその存在感を少しずつ訴え始め、“自然の郷「石ヶ入り」”が認知されることを望んでいるようである。

5. 今後の構想

那須烏山市の一大観光地“龍門の滝”、そのすぐ近くにある“自然の郷「石ヶ入り」”機会が有ったらぜひ立ち寄ってもらいたい。

まだ粗削りではあるが、少しずつ里山らしく周辺の山の中を整備し、木立の中を自然を満喫しながら散策して歩けるようにしていく予定である。



我々が子供のとき味わった石ヶ入りの自然の良さ、石ヶ入りでの自然との遊び、そして蝉しぐれやトンボの飛来草木の生長等自然との触れ合いを一緒に感じてもらえるように取り組んでいきたいところである。

6. よろこび

先日、なすから教育支援ネットワーク主催で“自然の郷「石ヶ入り」”の自然観察会を開催したところ、市内外から沢山の参加をいただいた。 保育園児から 80 代の大人まで、自然観察の面白さを存分に味わい、多くの発見に一喜一憂しハッスルする子供たちの笑顔に大人たちは押されっぱなしであった。 中でも、バケツを左手に捕獲用網を右手に持ち必死に水生昆虫を取る 3~4 歳と思われるお子の好奇心あふれる真剣なまなざしに、自然を相手にした時の子供本来の姿を見た思いがした。

自然は良い、もっともっと子供達を自然の中で精一杯遊ばせてやりたいものである。



(5) 特定非営利活動法人 てとてとて

人との出会い、思いを形に

鶴見 三代子

1. 設立のきっかけ

子育て応援や高齢者へのボランティア活動での人との出会いと学びからの『思いを形に』したく、賛同者の協力で「思いやり、支えあう NPO てとてとて」を平成17年9月に立ち上げる。名称「てとてとて」は、みんなのいろいろな手をつなぎ、地味に小さく、社会貢献活動をしたい！との思いである。いずれ誰もが通る道「老い」をどう迎え過ごすか…①高齢者分野と、誰もが思う「子ども達よ、すくすく育て！」…②子育て分野を主に活動を開始する。

2. 活動の実績

(1) 立ち上げ期 (H18年～H20年)

まず最初は高齢者対象に、地元自治センターにて運動・食事・笑う事の大切さを知っていただくこととする。NPO てとてとてのスタッフ（看護師・栄養士）の講話や体操、栄養満点の手作り弁当の試食会で和やかに過ごした。午後は普段見ることない切り絵やマジック、他のボランティアによる余興を楽しんだ。ここでみんなの笑顔が引き出されたことで、「てとてとて」の出来る事の一つが見えたのである。同じように子育てでは、食生活改善員の協力を得て、親子料理教室を開催する。



<立ち上げ初回のイベント風景>



<デイホームはなのお楽しみ>

平成18年5月。家庭の都合で働くことに縛りのある女性にも優しい職場があったら…。隣接町の空き家で小規模のアットホームな通所介護施設「デイホームはな」を開所。送迎、入浴、昼食、生活リハビリ、運動・お楽しみで毎日を過ごせる、癒される居場所として現在に至る。

好評だったのは、子育ての講演会（230名の参加は、託児ボランティア37名と後援者のお力に感謝）として、社会問題となっていた、「親子・人間の絆の形勢には情報化社会の中でのメディア漬けが影響している」との医療現場の憂慮から、平成18年12月3日診療所のY医師の熱意で、仙台医療センター小児科医長で、日本小児科医会



<メディア・ワクチン講演会>

「子どもとメディア」対策委員会の田澤雄作先生を講師にお招きし「メディア・ワクチン」としてメディアとの上手な付き合い方・予防策を学ぶ講演会を南那須医師会と共催する。那須烏山市教育委員会・県小児科医会・県教育委員会・さわやか福祉財団等の後援があったからこそである。

また、多世代の交流としての空き家の活用。月5～6回の「ゆったりや」は①高齢者②子育て仲間の交流、茶飲み場である。



＜戦中戦後の子育て談話に花が咲く＞



＜近くの公園に手作り弁当持ってお出かけ＞

(2) (H21年～現在)

「ゆったりや」活動は月1回の生き生き体操を主に、ふれ合い調理実習・お楽しみ会を随時実施中。子育て中の保護者を対象に、心を癒すパステルアート体験教室やアングーマネジメント座談会を実施する。



＜育児に協力的な優しいパパの姿が微笑ましい＞



＜じゃがいも・さつまいも掘り＞

3. これから、あったら良いな…

家族の介護や入院で急な外出時など、子どもを安心して託せる見守りの居場所（託児ボランティアや保護者の座談会中の託児）が必要と考える。

第2第3の「ゆったりや」「街中サロン」が出来、あちこちでお年寄り達が子ども達を見守り子どもの元気をもらおう。子育てに安心して、若い人達は生き生き仕事をする。こんな風景を描きたいと夢見ている。超少子高齢の時代を、

自分たちの子育て経験を思い起こし、又、やがてやって来る老いを、安心して暮らせるように…。NPO 法人てとてとては、「ゆったりや」を中心に、まちづくり支援団体として、「思いやり・支えあう」気持ちを持ち続け、私たちは地道に地味な活動をしていきたいと思う。



＜男性による託児ボランティア＞

(6) いきいきライフ積翠塾

地域振興のための烏山城築城 600 年記念事業の提案；10 件

内藤 正敏

烏山城は、2017 年に築城 600 年記念を迎える。烏山町史で、1417 年が烏山城築城の年とされている通りである。その記念事業の意味も込め、かつ烏山地域の活性化、振興を願って、筆者は、以下のような歴史上の課題を研究し、何らかの記念事業を催してはどうか、と考えている。積翠塾は、島崎善兵衛商店（和紙、荒物ほかの販売）の 6 代目で烏山町の町勢振興に功績のあった島崎善平氏の別荘、積翠荘を拠点とする交流会である。この交流会を「いきいきライフ積翠塾」と名付けて、筆者は「那須氏研究会」（長内光弘氏ほか）とともに 2005 年以來 2010 年まで 60 回にわたり、烏山城と烏山藩の歴史をはじめ烏山の郷土史、那珂川流域を含む風土、文化、歴史について勉強する研究会を開催してきた。その内容は、那須烏山市の助成により、「那珂川流域風土記」シリーズ(1) (2010 年)およびシリーズ(2) (2011 年)として刊行された。

2011 年以降、「那須烏山市まちづくり研究会」に、いきいきライフ積翠塾として、ほかの各種 NPO 団体などとともにオブザーバーとして参加するように、との勧誘を受け、毎年度末の研究発表会にも参加し、いままでに積み重ねてきた郷土史研究成果を発表している。（「那須氏研究会」の成果発表内容は、後述の酒入ゼミ報告を参照）。

積翠塾によるこの研究成果を基に、“那須烏山市全体として烏山城 600 年記念事業を実施してはどうか”と筆者が考える 10 件を提案したい。紙幅の関係で、そのうちの 4 件だけについて以下に内容を説明し、他の 6 件は項目のみを挙げるに留める。

1) 永井伊賀守直敬公と烏山

江戸時代の元禄 14 年（1701 年）、江戸城本丸の大廊下（松の廊下）で、赤穂藩主浅野長矩（浅野内匠頭）が吉良義央（上野之介）に対する刃傷事件を起こした。3 月 14 日のことで、いわゆる「忠臣蔵」の発端である。東山天皇の勅使を接待する役（御馳走人）に命じられていた浅野長矩と、その際の礼法指南役であった吉良義央とのあいだで争いがあったという。勅使が江戸に着いて登城している間であったため、将軍徳川綱吉は激怒して直ちに長矩に切腹を命じ、赤穂藩の改易を決めた。

この時期、寺社奉行の職にあったのが烏山藩主 永井直敬で、若年寄の稲垣重富（次の烏山藩主）らとともに、「即日の切腹、改易とは武家諸法度に反する、慎重な取り調べが先ずなされるべきでは」と老中に上申しようとした。しかし大老柳沢吉保が綱吉への取り次ぎを断ったため、当日午後には、長矩は一関藩田村家江戸屋敷に連行され、幕府目付庄田安利、大久保忠鎮らの立会のもと、田村家屋敷の庭で切腹した。

永井直敬公はその後始末（浅野家臣による長矩の泉岳寺葬儀、仇討をした四十七士の取り調べなど）の重責も担ったのち、赤穂藩の藩主に、ついで幕府若年寄に昇進、江戸城の金庫番も務めた。その関わりのためか、赤穂浪士の関係者を烏山藩内で匿ったという説もあるが、幕府に遠慮してすべてが隠され、光が当てられてこなかった。しかしこの時期の永井直敬公の功績は、烏

山八景俳諧奉納額を「吉良を近じか討ち取りて共に死す」との祈願額であると読み解かれた皆川晃氏の功績とともに、改めて資料の検証と市民による顕彰をせねばならないと思う。

2) 大久保常春公が 1725 年烏山藩主となられたこと

徳川幕府第 8 代将軍 徳川吉宗は、家康の直系ではない紀州徳川家から将軍に迎えられ、政権を託された。徳川家継が 1716 年に死没した後、幕府の最大の使命は治安力を持つ政権の維持であったからである。尾張徳川家の派手な行為に批判が高まっていた折で、水戸徳川家の強い支援もあって吉宗が推されたのである。後年、吉宗は幕府中興の祖といわれるが、家継の代から幕府若年寄に任じられていたのが大久保常春公で、政権交代時に吉宗の補佐役という重責を担った。朝鮮通信使対応なども果たし、1725 年（享保 10 年）烏山藩主（城主）となった。常春公は、家康の江戸入城以前からの支持者で武功のあった三河国の大久保氏の一族、大久保忠員の第 6 男 大久保忠為の曾孫にあたる。（ちなみに忠員の長男は小田原藩、初代小田原城主大久保忠世で、第 7 男は大久保彦左衛門 忠教である）。

烏山藩主となって、常春公はすぐに郷中御条目 92 カ条を公布し藩の政治体制整備を心がけるとともに、実質的な吉宗の守り役も担っていた。吉宗将軍の日光東照宮参拝（日光社参）のさいは準備を受け持ち、実際の社参の機会には烏山滞在の 4 日間の世話役を担った。これらのことは大変な名誉とされる一方で、藩の財政には大きな負担となった面もあるが、それを藩民が支えたことは大きな功績といえるはずである。また、寿亀山神社にはご本尊として、吉宗将軍御下賜の常春公坐像と厨子が祀られており、市の重要文化財に指定されている。これらの関係資料を検証し、藩と藩民の努力の正しい評価がなされ、顕彰すべきだと思う。併せて、築城 600 年を目途に、烏山城資料館をはじめ、交流館、休憩館などの整備も進めることを筆者は提案したい。

3) 二宮尊徳と烏山

江戸時代後半、当時の東日本の各地は天候不順による飢饉にしばしば襲われた。とくに天保年間の大飢饉の折は、烏山藩領内でも農民が困窮して農村の荒廃も進み、烏山藩の財政も借財がかさんで逼迫していた。烏山藩の第 6 代藩主大久保忠保公は、菅谷八郎右衛門を家老に登用し、「二宮尊徳の報徳仕法」を藩政改革に導入することを意図した（天保 8 年、1837 年）。当時、尊徳は、小田原藩大久保家の分家、幕府旗本の宇津家の領地、下野国桜町領の復興のために、小田原藩主大久保忠真の命を受けて桜町（現在の真岡市）に住み（文政 6 年、1823 年～）、農村改革の指導をして成功しつつあった。

烏山藩の天性寺住職円応と家老菅谷八郎右衛門は度々尊徳を訪ねてはその改革指導の方法（「報徳仕法」）を学び、かつ尊徳を烏山へ招聘するよう努力を続けた。報徳仕法の特色は、一つは天保飢饉に対する救急仕法であり、他は「一円融合」の理のもと、身分の上下を超えた領民の協力、つまり農民は言うにおよばず町人・武士をも巻き込んだ荒れ地開墾の努力である。その「仕法」を成功させるためには、藩主に儉約の決意を求めるとともに藩庁の役人にも儉約の自覚を促し（「分度・推譲」、農民には「農業に専心努力すべき事」への理解と協力（朝 2 時間早く働きに出る、荒れ地を開墾する、その努力には報いるなど）を求め、これが「一円融合」だと説いた（「二宮金次郎正伝」二宮康裕（2010））。

一方の救急仕法は、飢饉で餓死しかねない人々を救う仕法である。菅谷と天性寺の円応は、寺

の中門の両側に応急の小屋「お救い小屋」を建て、そこに衰弱者を収容するとともに、外から集まる貧窮民にも、桜町の宇津家ほかからの救援米を集めて粥（雑炊）の給食を行ない続けた。そのお蔭で当時、水戸藩の領民には餓死者が多く出たが、烏山藩では出なかったという（「烏山町史」および「二宮翁夜話」）。

しかし仕法の導入開始の天保7～8年から僅か3年後の天保11年（1840年）、烏山藩の江戸詰藩主側近（「仕法」中止を主張、「分度」への不満）と烏山在地藩士・領民（「仕法」推進を主張）とのあいだで意見の対立を繰り返しているうちに、菅谷とともに相模国厚木領に支援の交渉に行った円応が病死（そこで毒を盛られたとの説も）、菅谷も病気がちとなった上一時的に追放の処分を受け、仕法も中止された。1842年に仕法は再開され、菅谷も家老に復帰したが、もはや仕法の成前は困難となっていた。これらの事情は改めて検証されるべきである。そして犠牲となった天性寺円応と菅谷八郎右衛門の顕彰も広くなされるべきだと筆者は考える。

4) 那須大八郎宗久と烏山

那須大八郎宗久は那須与一宗高の弟で、源頼朝に能力を買われて厚く信頼されていた。1185年（寿永4年、文治元年）の壇ノ浦の合戦で平家が滅びた後、平家の落人たちは九州各地の山間に隠れ住んだ。日向国椎葉（宮崎県椎葉村）はその中でももっとも奥地に当たり、その地に平家落人が住むことが頼朝の耳に入ると、その追討を那須与一に命じた。しかしその時は与一が病気であったため、兄に代わり大八郎が軍勢を率いて九州に渡り、平家の残党を求めて椎葉に入った。

椎葉に入ってみると、平家落人たちはひっそりと平和に暮らす農民となっていた。大八郎はその農民たちの哀願を聞き入れ、鎌倉幕府には、落人をすべて征伐したと嘘の報告をし、この地を守る立場をとった。しかしまもなくその嘘は頼朝に知られるようになり、「烏山藩（那須家）を取りつぶされたくないのであれば出頭せよ」と命じられたため、大八郎は罰を覚悟で出頭することにした（1187年頃）。

そのときすでに、共に生活していた平清盛の子孫という鶴富姫が子を孕んでいたため、出頭するにあたり鶴富姫に「男子が生まれたならば烏山にて、女子が生まれたならば椎葉の地にて育てよ」と言い置いて椎葉を立ち去った。生まれたのが女子であったため、鶴富姫はその子に婿を取り、那須下野守と名付けた。椎葉にはその子孫として、那須の姓を名乗る家が今も半数以上ある、というのである。

大八郎は出頭後1年間牢獄に繋がれたのち、比叡山に行き出家した。吉川英治の「新平家物語」にはその後の大八郎の動勢も語られている。宮崎民謡「ひえつき節」の歌詞にも大八郎と鶴富姫の出会いが唄われている。

現在の宮崎県椎葉村には、鶴富姫の住んでいたという鶴富屋敷（那須家住宅、国重要文化財）があり、隣接して大八郎が平家供養のために建てたという椎葉巖島神社もある。椎葉村はこれらの歴史を背景に、壇ノ浦合戦800年記念として「椎葉平家まつり」を1985年（昭和60年）に開催、それ以後も毎年「平家まつり」を開催している（11月の第2金曜から日曜まで）。人口約5千人の山村に、このお祭りのときは2万5千人のお客が来訪するようになったという。大和絵巻武者行列では全国から参加希望者を公募、平家方は主に鶴富姫方女性群、源氏方は男性群が衣装をつけて行列する（椎葉村広報）。

椎葉村でこのような記念行事をしているのに比べて、同じ那須本家方の烏山が何の記念行事も

しないことは不思議である。烏山藩は、藩を守るために那須大八郎を廃嫡したとはいえ、九州椎葉の地で大きな功績を残した郷土の武人を、市民の誇りとして顕彰しても良いのではないかと考える。（「那須烏山風土記」（加倉井健蔵）も参照されたい）。

以上に加えて、次の6案件も、地域活性化のために市民として取り上げたい課題であるので、その表題のみを記し、簡単なメモを付しておく。

- 5) **謡曲「放下僧」と烏山**；この謡曲の主人公 牧野次郎丸は牧野左衛門勝重の子であるが、勝重は烏山城主那須資晴の弟那須頭高のことである。勝重が相模国利根大膳信俊に殺されたので、次郎丸と弟小次郎が放下僧に扮して仇討をした。この牧野家は元烏山女子高校の地にあったという。漢詩詩人安達文仲はこの牧野家の出身である。再検証したい。
- 6) **宮原八幡宮と那須資祇**；那須家ほか烏山城歴代の領主の守護神であり、那須家の歴史と併せて市民が正しい認識を共有する必要がある。
- 7) **圃租法変更、永納請願運動**；納税の在り方の再検討の請願は、永井直敬藩主の時代から、尊徳仕法の時代を経て明治2年に至るまで、飢饉の起こるたびに農民によって度々行われた。明治2年、お米の年貢（圃租）が納められないのでお金で納める（永納）ことの請願には、明治新政府は名主たちを謀反人として処罰した。この犠牲者の慰霊碑が宮原八幡宮に建てられているが、慰霊祭もなしに放置されている現状は好ましくない。
- 8) **早野巴人、常磐たん北、牧野牧陵と烏山**；郷土ゆかりのこれら文人、俳人、画家の業績を再検証すべきである。
- 9) **江口襄、川俣英夫、島崎善平、志村烏嶺**；明治維新後の烏山における歴史の理解のためにとっても重要な人たちであり、再検証すべきである。
- 10) **天狗党と烏山**；明治維新の国内戦争と水戸藩の藩内戦争のはざまの烏山藩の事情の再検証が必要な時ではないか。那須資実の子孫である檜山家に養子として入っていた楠音次郎は、水戸天狗党の者何人かを匿っていたが、主家に迷惑がかかるからと千葉九十九里浜に連れ出し、尊王攘夷の「真忠組」を旗揚げした。これも再検証したい。

（註：以上は、紙幅の都合上、内藤正敏氏の長い原文の趣旨を生かしつつ短縮して4頁に収めるために、内藤氏の依頼により大久保忠旦が修正執筆した。）

(7) 街に賑わいを興す会

和服で街中散策

小川 二三雄

1. 活動内容

(1) 会の設立

那須烏山の特性を活かした街の賑わいを考えた時、和服を着て街を散策すると改めて感じる街の良さと発見があるのではないかと。またダンスの中で眠っている着物を見直しては、「もったいない」から始まった談話はいつの間にか、着物好きの6人で、那須烏山の魅力ある自然と歴史文化を発信すべく、平成22年5月6日に「街に賑わいを興す会」を設立した。

(2) 会員名

会長 小川二三雄

会員 森トク、荻野目カツ子、野木國子、萩原宣子、小堀弘子

(3) 事業内容

まず、会員資金を募り、ポスター作りに入る。幸い市の支援事業の協力を頂けることとなり他市町村で行っている着物イベントに参加し、インターネットを利用した人集め、客を迎えるもてなし方、心遣いなどを学んだ。

また商店会とネットワークを図ることで、那須烏山に合った着物の普及とこの街だからこそ出来る街中散策に期待が持てた。

平成22年第1回着物で街巡りは、那須烏山里めぐりと題し、約30名の参加を頂き、市内のバスツアーとなった。

龍門の滝、洞窟酒蔵、古民家大木邸、烏山大橋、烏山城カントリークラブ等、秋の彩りを感じた里めぐりは、新聞等にも採り上げられ、宇都宮・日光・矢板・他町から参加された方々から感動の言葉を頂いた。当日、カメラ愛好家の協力もあり、趣旨としていた活動が出来た。

この事業の写真等を利用してポスターを作製し県内各市町村と市内商店に掲示して頂いた。



掲示用ポスター

平成22年度

- ◎第1回 里巡り（八雲神社・龍門の滝・洞窟酒蔵・古民家大木邸・烏山大橋・臥龍閣）
- ポスター作成（県内市町村へ配布・町内商店PR）

平成23年度

- ◎第2回 街中散策（神社・寺院・商店街巡り）
- 夏祭り 接待と交流
- 山あげ祭 ゆかた写真コンテスト
- 入賞作品の展示（市民カフェ35番館）
- ◎第3回 歴史と浪漫の街中散策
（那須烏山の歴史と文学巡り）



平成24年度

- ◎第4回 着物で雛巡り（街中雛巡りと市役所訪問）
- いかんべ祭 写真コンテスト
- 入賞作品の展示（市民カフェ35番館）
- 横枕ゆかたコンテスト 審査協力と着付け
- 着付けの講習 春2回 秋2回
- ◎第5回 街中歴史探訪
（南那須地区寺院と庁舎・議会議場視察研修）



第4回着物で雛巡り
（市役所訪問）

平成25年度

- ◎第6回 雛巡り街中散策
- ◎第7回 彩りゆくふる里散策
（大木須そば祭・龍門の滝・抹茶体験）
- 着付講習
- 横枕ゆかたコンテスト協力

平成26年度

- ◎第8回 街中桜巡り
- 横枕ゆかたコンテスト協力
- ◎第9回 着物で大木須新そば祭



第8回街中桜巡り

設立5年目となる会の事業は、歴史・文化そして自然の豊かさにも恵まれ回を追うごとに新しい発見がある。また各団体とネットワークを図ることで会の活動はふくらみを増し、着物で街中を散策すると、歴史と文化の街を改めて感じる。違った目線で街を見、風を感じる事で街の良さを益々発信できる。

春夏秋冬それぞれの街並みの素晴らしさは、我が町の財産であり着物の輪を広め他町村より足を運んでいただけるよう継続していきたい。